

異なる文化と出会う
フィールド科学調査法

2012 年度カンボジア・スタディーツアー**報告書**

カンボジア農村の**洪水と生活戦略**

2012/12/4

埼玉大学**共生社会教育研究センター**





ごあいさつ

多くの方のご協力のもと、2010年から正規の授業として始めたカンボジア・スタディーツアーを、今年も無事、実施することができました。この授業は、もともとは本学全学教育テーマ教育プログラム「社会と出会う」の授業の一つである「異なる文化と出会う」として構想され、種々の事情から教養学部現代社会専修の授業「フィールド科学調査法」としても開講されることになったものです。本報告書は、学生たちが帰国後に提出した、この授業の期末レポートをまとめたものです。

これまでと同様、この授業では、現地受け入れ先としてNPO法人ピープルズホープジャパン(PHJ)のカンボジア事務所の協力のもと、PHJのプロジェクトサイトであるコンポントムを訪問して学生に聞き取り調査を実施してもらい、その結果を現地住民およびPHJスタッフの前で報告してもらいました。また、この調査の準備として、東南アジアとカンボジアの歴史と社会的特徴、および国際協力と農村生活の基本について、カンボジア訪問前に日本で事前学習を行いました。また、カンボジア社会の理解の深化を目的として、プノンペンにおいてトゥールスレン虐殺博物館と国立博物館を見学した他、現地在住の日本人にお話をお伺いし、シエムリアップではアンコールワットとアンコールトムを見学しました。

この授業には、今年は12人の学生が参加し、小さなトラブルはいくつかあったものの、学生の皆さんの協力で大きな事故もなく終了することができました。途中、いろいろと大変な作業もありました。調査成果を発表する前日には、発表準備のために夜遅くまで起きて作業をしていた班もありました。しかしまた、一日一日と学生たちが変わっていくのがよくわかる授業でもありました。学生たちにとっても印象深いカンボジア滞在となったようで、来年も引き続き同様の授業を続けて欲しいという声が上がりました。

このように好評のうちに終えることができたのも、関係する皆様のご協力があったからです。特にPHJスタッフのみなさん、なかでも、ツアーに同行して下さった横尾勝さんと北島弘さん、および裏方としてスケジュールの調整をして下さった武長純子さんおよび久米由美子さんに、お礼を申し上げます。

2012年12月4日

埼玉大学教養学部教授 三浦 敦

謝 辞

このスタディーツアーは多くの方々のご協力によって実現しました。ここに記してお礼を申し上げます。

まず、現地での受け入れをお認めくださった NGO 法人ピープルズホープジャパン（PHJ）にお礼を申し上げます。特に PHJ 本部の石関正浩さんと武長純子さん、および PHJ の前カンボジア事務所長の久米由美子さんには、ツアーの企画段階からさまざまなサポートを頂きました。また、横尾勝さんと北尾弘さんにはツアーに同行して頂き、様々な局面において助言を頂きました。この授業は、このような PHJ 日本スタッフのみなさんの支援なしには実現しませんでした。

また、PHJ カンボジア事務所長のソピアさん、ブンチャックさんを始めとする現地スタッフのみなさんには、現地の関係者へのインタビューをアレンジして頂いたほか、自動車の手配や通訳などもして頂きました。

われわれの突然の訪問にも関わらず暖かく迎えて下さりインタビューに応じて下さった、コンポントム州バンティチャ村とタノンチュム II 村の皆さんにも、大変お世話になりました。そしてタノンチュム保健センターのヘルスワーカーの皆さんにも大変お世話になり、また大変勉強になりました。

そのほか、カンボジアと日本の関係についてレクチャーして下さい、フリージャーナリストの木村文さん、および学生たちの夕食につき合って頂きいろいろカンボジアの現状について教えて下さった、JICA 海外青年協力隊員の佐野美央と福永未帆さんにも、お礼を申し上げます。

株式会社ピースインツアー（PIT）には旅行の手配全般でお世話になりました。特に小山さんには旅行全般にわたって有用なアドバイスを頂いたほか、PIT 現地ガイドのモニーさんと運転手のマップさんには滞在中に柔軟に対応して頂き感謝しております。学生たちには、そのお人柄ゆえにモニーさんはとても人気がありました。

最後に、この授業の支援して下さい、埼玉大学の加藤泰建副学長、この授業を最初に提案して下さったほか様々な場面で支えて下さった、埼玉大学共生社会教育研究センターの藤林泰センター長、およびこの授業を実施するための細かな事務作業をして下さった埼玉大学学務部教育企画課の岸隆一係長および大森浩美係長にお礼を申し上げます。



調査地 コンポントム

(バライ=サントウク保健行政区事務所、タノンチュムII村、バンディチャ村)

授業の概要

三浦 敦

「異なる文化と出会う／フィールド科学調査法」の授業は、異文化を理解するとはどういうことかを実際の現地調査を通して理解することを目的とする。その狙いは、学生たちに、日常的に接することがない、異なる文化を持つ世界の人々（特に途上国）に直接出会わせ、その現状に触れることを通じて、日本では見られない独自の問題や異なる考え方に目を開かせ、自分たちの住む世界を客観的に見る視点を養うことにある。またあわせて、自分の体で現地の人々と学ぶ楽しさや難しさを体感することを通して、言葉や文化の異なる人々とコミュニケーションをとる能力を養うことも目的としている。

とはいえ、「異文化に接して異文化を理解する」という目的は漠然とし過ぎている。そこでこの授業では一定のテーマを取り上げて、そのテーマについての調査を通じて異文化に接し、人々の生活の理解を試みてもらうことにしている。今年は、2011年10月および11月に、タイとカンボジアが大規模な洪水に襲われたことを踏まえ、「洪水と生活戦略」というテーマのもと、人々がどのように洪水に対処したのか、洪水の影響はどのようなものだったのかを調べてもらうこととなった。危機にどのように対処するかは、人々の生活戦略や価値観において基本的な問題であり、また2011年3月の東北大震災においてやはり甚大な危機に直面した我々にとっても、無関心で入れない問題だからである。旅行費用は学生の自己負担というハードルにも関わらず、12人の学生（教養学部生9人、経済学部生2人、大学院文化科学研究科修士課程学生1人）が授業に参加した。

この授業は現地調査を主眼としているが、もちろんいきなり現地に行っても調査ができるわけではない。そこで、2日間の事前学習をおこない、異文化を理解するとはどのようなことか、カンボジアはどのような歴史的背景と社会的特徴を持つのか、農民の生活戦略の問題は何か、といった点について、その基礎知識を学んでもらった。カンボジアには1週間滞在し、農村においては、4つの班に分かれて一つの村で2班ずつ、2つの村で聞き取り調査を行った他、カンボジア社会を知るためにいくつかの施設を見学し、また現地在住日本人の方にカンボジアの現状についてお話を頂いた。そして帰国後、レポートを提出してもらい、報告会を行った。

調査を行ったタノンチュムⅡ村とバンティチャ村は、トンレサップ川沿いの広い沖積平野の中にあり、稲作を始めとする農業がその生業の基本となっている地域である。また、近くの工場で働く人もいる他、プノンペンなどの大都市に出稼ぎに行く人もいる。村の中は木々が生い茂り人々は木陰の中で生活しているが、村の外に出ると水田や畑が広く展開している。

事前学習（8月16日・8月17日）

8/16 異文化を理解するとはどのようなことか、東南アジア社会の概要と歴史、カンボジアの歴史（アンコール朝の特徴、ベトナム戦争とカンボジア内戦）、カンボジア社会の特徴（カンボジア農村の社会構造、現代カンボジアの抱える社会問題）

8/17 危機と生活戦略、なぜ生活戦略を調べるのか、生活戦略をめぐる農村調査の方法、調査計画の立案と報告、カンボジアでの実際的注意

スタディーツアー（9月1日～9月8日）

9/1 日本出国、ホーチミン経由でカンボジア入国

[プノンペン訪問]

9/2 キリングフィールド見学

トゥールスレン虐殺博物館見学

講義「現在のカンボジア社会が抱える諸問題」（フリージャーナリスト・木村文さん）

ロシアン・マーケット訪問、JOCV 佐野さん・福永さんとの夕食

9/3 セントラルマーケット見学

メコン川河畔散策

[コンポントム訪問]

コンポントム州の調査地（バンティチャ村とタノンチュムⅡ村）訪問

講義「コンポントムの保健の現状と PHJ」（PHJ カンボジア事務所長・ソピアさん）

9/4 コンポントム州バライ＝サントウク保健事務所訪問

調査村訪問・民家での一般住民への4班に分かれての聞き取り調査

9/5 調査村訪問・民家での一般住民への4班に分かれての聞き取り調査

タノンチュム保健センターでの2班に分かれてのヘルスワーカーへの聞き取り調査

調査成果のまとめ作業

9/6 タノンチュム保健センターでの、各班による調査成果の報告（調査村住民、TBA、ヘルスワーカー、PHJ 現地スタッフ参加）

[シエムリアップ訪問]

ナイトマーケット見学、アプサラ・ダンス見学

9/7 アンコールワット見学、アンコールトム見学

カンボジア出国

9/8 ホーチミン経由で日本帰国

報告会（9月28日）

9/28 参加学生各人による、調査成果と考察の発表、およびレポート提出

本学はグローバル教育をめざしているが、カリキュラムの大半は欧米に目を向けたものであり、発展途上国に向ける関心は全学的に低い。しかし幸いこの授業では、学生たちにはカンボジアのような東南アジアの国に関心を持ってもらうことができ、それは嬉しい発見であった。またカンボジア滞在中、学生たちの村人に対する誠実な姿勢と学生たちが日々成長する姿を見て、改めて今の若者たちの可能性を再認識した。小さなトラブルにも関わらず学生たちには高く評価してもらえる授業となったが、これは PHJ の横尾さんと北島さん、および学生たちのおかげである。

カンボジアにおける家族の生活

教養学部

平野 大地

最近、日本でテレビや街で、「カンボジアに学校を建てよう」などの募金活動や企画をよく目にする。去年、向井理主演で映画化された書籍「僕たちは世界を変えることができない。」も大学生がカンボジアに小学校を建てるまでの過程が実話をもとに描かれている。では、学校が建てられるカンボジアの農村の生活はどのようなものなのか。貧困国と呼ばれるカンボジアの人々の生活は“貧しい”のか。実際に6人の村民にインタビューをした。



1人目の Binken さん(写真中央)
45歳で子供が8人(25歳~8ヶ月)
両親と共に暮らしている。

6人インタビューした中で4人は子持ちの農家の方という共通点があったが、畑の敷地の面積は自分の家で食べる分も精一杯の家庭から、余った分を売りに出す家庭まで様々だった。またすべての家庭が家畜を飼っていて、主に牛や鶏、番犬として犬を飼っている家庭や畑を耕す用のバッファローを飼っている家庭もあった。家畜は食用としてや売りに出すため、また食用として魚を育てている家庭もあった。また昨年起こったタイの大洪水の被害についてきいたところ、米が駄目になってしまったという家庭が多かった。それ以外には、洪水は段々水面が上がってきたので、家畜を避難させることもできたし、小さな洪水はよくあることらしく、僕たちが予想していたよりも被害は小さかったようだ。また日本の住居とは異なり、カンボジアの農村の住居は高床式で二階に住居スペースがあるため、住居内に浸水するという事はなかったらしい。



住居(写真右)風通しがよいため、
木造が一般的。
中央は牛、放し飼いされている。

家の造りの他にも、日本の生活と違う点がいくつかある。これは途上国一般に言えることらしいが、日本に比べ結婚、出産の年齢が低い。インタビューした人の中には、16歳で結婚して17歳で出産した人もいた。

次に買い物について、日本では働いてもらった給料で必要なものを買うのが普通だが、カンボジアでは、村の小さな店で買い物をする場合、物々交換かツケで払うのが当たり前らしい。通貨を使って買い物するのは、村の外のマーケットで買い物をするときくらいのようなのだ。そのため日本とは通貨の価値が異なってくる。



カンボジアの市場
食品の他に衣類や雑貨も
売っている

最後に学校について、これは日本人の感覚とはだいぶ異なっていた。小学校には基本的にどの家庭も行かせている、行かせていたようだが、中学校には行かせる家庭も行かせない家庭も、また経済的理由で行かせられない家庭など様々であった。小学校では一般常識の他、クメール語の読み書きをやるが、中学校になるとそれより高度な内容になるため、行かせる必要性を感じない親が多いのだ。実際、村で一生農家として暮らすなら、必要がない。学校に行けないのではなく行かない場合もあるのだ。高校まで行くのがほぼ当たり前になっている日本とは随分考え方が異なっている。しかしこれはカンボジア国内全体に言えることではなく、実際インタビューの際連れ添ってくれた通訳さんは都市部の大学をしたと言っていた。都市部と農村部の生活に大きな差があるのもカンボジアの特徴である。



シェムリアップの街

最後の二日間で訪れたアンコール・ワットのある都市、シェムリアップはあまり日本の街と変わらない印象を受けた。特徴的だったのは、バイクタクシー“トゥクトゥク”の勧誘やバイク

が多いということ。お土産店の店員は日本語を話すし、現地の人よりも観光客向けの商売が多いように感じた。クメール語の読み書きができない人もいる田舎の農村とはだいぶ異なっている。

四人の子持ちの男女の方の他に、TBA (Traditional Birth Assistant = 産婆) のお婆さんにお話を伺った。



TBA の Oung Lang さん
(写真中央)
左は娘さん

彼女は妊婦さんの家に行って出産の手伝いをする産婆さんの仕事の他、農家、たまに雇われの労働もするという活発な方だった。TBA の仕事は出産を手伝うだけではなく、子育ての手伝いをすることもあるそう。彼女の叔母が元々TBA だったらしく、叔母に紹介されてTBA になっただけで、今カンボジアではTBA を資格化しようとする動きがあるらしく、叔母から継いで、ということではできなくなるかもしれない。しかし彼女はそれについて反対はしなかった。彼女はTBA の仕事に誇りを持っているらしく、子供が生まれるまでは怖くて緊張するが生まれた瞬間幸せになるそうだ。TBA は周辺には彼女ともう1人しかいないらしいが、充分足りているという。それは日本の支援により建てられたヘルスセンターの影響があるそうだ。また彼女は向こうの人もあまり話したがらないカンボジアの内戦の時期の話をかかせてくれた。結婚した時期がちょうど内戦の時期だったらしく、爆弾に怯えながらの結婚式だったらしい。夫と子供たちと十分な食事がなかった生活は大変だったが、子供たちのために頑張れたという。彼女は仕事を兼業していて、夫は結婚式の準備をする仕事をしているそうだ。この話をきいても、また家の中を見渡しても、彼女の家は村一帯では割と裕福そうに思えた。都市部では言い方は悪いかもしれないが、村よりももっと便利な生活ができる。しかし彼女は村で生活を続けている。いったいなぜなのかはきいていないから残念ながらわからない。しかし彼女はとても幸せそうだった。農村での生活に彼女は満足しているように、僕には見えた。

最後にインタビューしたのは、ヘルスセンターのスタッフの方。ヘルスセンターとは病院の簡易的なもので、政府のサポートによって運営されている。医者はおらず、重病の場合は近くの病院に搬送する。風邪や感染症等の治療や、出産のための設備などがある。中でも特徴的なヘルスセンターの活動は、月に一度ほど村に出向いて、病気や子育ての知識を提供しているということだ。村の人の中には文字の読めない人もいるので、絵を使い紙芝居形式でやるそう。村にとって、ヘルスセンターは非常に重要な役割を担っているようだ。特に今年の洪水の際は、

水に浸かることにより発症する皮膚病の治療を多くしていただきたい。スタッフさん曰く、スタッフの数は充分足りているが、設備はまだ充分ではないとのことだった。



ヘルスセンターの指導で実際に使っている絵。(左)



実際の一週間、カンボジアの首都プノンペン、田舎町コンポントム、観光地シェムリアップにそれぞれ滞在してみて、僕が一番感じたのは、みんな幸せそうだった。コンポントムでインタビューしたときも、みんな笑っていた。カンボジアに行く前、僕は村の人々は生活に苦しみ、笑顔のあまりないところだと失礼ながら勝手に思っていた。しかし実際にはそんなことはなかった。日本人から見れば、トイレや冷蔵庫もない、そのような生活は、“可哀そう”などと思うかもしれないが、彼らは決してそのようなには思っていないように感じた。子供たちも人見知りなど全くなくて、常に笑顔だった。さらに都市部や日本と比べてとても時間がゆっくり進むような気がした。また貧困国と言われるカンボジアの生活は、地域によってかなり異なっており、一言でカンボジアの生活は～などと言うのは難しいだろう。また今回僕たちの班でテーマにしたカンボジアの農村の子供たちと教育についてだが、学校のとらえ方も日本と異なっていて、学びの場より遊びの場として捉えているらしい。村で農業をして生活をしていくのに、中学校以降の知識はあまり必要ではないため、学校に行く必要性を村人たちはあまり感じていないように思えた。教育についてのとらえ方が日本と異なるので、仕方ないのかもしれない。トリックルダウン仮説というものがあるが、日系企業などの多くがカンボジア都市部に進出し、都市部の人々の生活がさらに豊かになっていく今、農村部の生活も少しずつ向上していくかもしれない。村の人々はそれを望んでいるかはわからない。しかし村には衛生上など問題が

まだある。これからカンボジアが発展していく過程で、農村の生活の質が少しずつよくなってほしいと思う。

カンボジアの貧困の実態と格差

教養学部
鹿野 友宏

私は、このカンボジアスタディーツアーを通して、カンボジアの都市と農村の両方の人々や彼らの生活、また生計戦略を見てきた。そして、このスタディーツアーを通して途上国であるカンボジアの人々が本当に貧しいのかという疑問が生じた。カンボジアへ行く前、私は昨年上映された映画や事前の授業などからカンボジアはとても貧しい国だと思っていた。しかし実際に都市部に訪れてみると人々の皆が貧しいわけではないことが分かった。また農村でも、不自由なく生活している人々と貧しい人々がいた。このレポートでは、農村でのインタビューと都市の生活の様子、文献を利用して、カンボジアの人々の豊かな生活と、貧富の格差について明らかにしたい。

農村でのインタビューから私はカンボジアの農村での人々の暮らしを知ることができた。私たちの班では、何組かの子どもがいる夫婦に農村の生活についてインタビューを行った。まず、始めに伺った家の夫婦は、8人の子どもがいてそのうち双子が2組いた。夫は農家で18ヘクタールの田んぼで米を耕作していた。カンボジアでは3ヘクタールが一般的であるので、とても規模の大きい米栽培であることがよくわかる。そのため米は自分たちで食べるだけでなく、売りに出すこともでき、また収穫期以外もパームヤシや魚を捕るといった副業も行っていった。双子が2組も生まれて一気に家族が増えたので、とても育てていくのが大変だったと言っていたが、今では長女が結婚しその夫や自分の息子たちも手伝ってくれているので、不自由のない生活をしているようであった。また洪水時はボートを持っていて、それで移動をしたそうだ。次に伺った家では、23歳で2歳の息子を持つ女性に話を聞いた。その女性は夫の家庭に嫁いできていて、義理の母や兄弟姉妹とともに暮らしていた。夫は米を作っていて、家から6キロ離れた田んぼで、近くのコテージに住み込みで農家をしている。田んぼは2ヘクタールで、2日おきに家帰ってきているとのことだった。米は売りに出さず、家で食べるためだけに作っており、最初の家族とは大きく異なることが分かった。この夫には母と9人の兄弟姉妹がいて、家族の規模は最初の家族とほとんど変わらない。経営する田んぼの規模は全く異なっているが、二番目の家庭でも魚を捕ったりという副業を行っており、また夫の兄弟たちも出稼ぎや農業の手伝いをしてくれているので、自給自足の生活をしていて不自由はないようであった。次にインタビューへ行った家庭は34歳の夫と31歳の妻で、2人の娘がいた。この家庭で今までと異なっただのは夫が労働者であったことである。彼は毎朝5時に起きてコンポントムへ働きに行っていた。もともと大工をしていたが、今は出稼ぎに行っているとのことだった。今の仕事の内容についても尋ねたがあまり話たくなさそうであらなかった。この家族は田んぼを持っておらず家畜も飼っていなかったが、鶏を食用に飼育していた。洪水の時は、ボートはなかったので移動の際は、水に浸かって歩いて移動するしかなかったようだ。4件目にはご近所で集まっていた女性たちの1人に話を聞いた。その時は、1つの家庭のことだけでなく、そこにいた女

性たち全員から話を伺うこととなった。近所の付き合いが密で、米の収穫の時には女性たちが労働力を他の世帯にも提供し協力し合うという話をしてくれた。また同年代の女の子には携帯電話を持っている子もいて、コンポントムのマーケットで買えることや、田んぼと家が離れているので家族同士で連絡を取り合うために携帯電話を持っている人が結構いることを知って驚いた。これらのインタビューから、農村でも不自由なく生活している家庭と貧しい家庭との間に大きな違いがあることが分かった。不自由のない家庭では、自分たちで食べるものはほとんど飼育・栽培していて、また副業もしていて、家にはテレビが置いてあり、洪水時はボートで移動を行っていた。しかし、貧しい家庭では自給自足がなかなかできなかつたり、洪水時ボートがなく苦勞しているようであった。もちろん家にテレビも置いていない。そのような家庭では子どもたちを学校に通わせることも大変で、小学校には通わせるが中学へは進学させられないと言っていた。



カンボジアの教育についてもバスガイドさんの話やインタビュー、文献からデータが得られた。カンボジアでは、日本と同様に9年間の義務教育が憲法上で定められている。しかしこれは必ずしも徹底されてはおらず、家庭の事情により行かせられないことが多い（上田、岡田2006: 263）。文献の資料（p.264）によると、小学生の就学率は全国で90%を超えているが、中学校は25%、高校は10%に達していない。この就学率は都市部と地方で大きな差があり、都市部では中学校は40%、高校は20%を超えているが、地方では中学校が20%、高校が6%となっている。実際、私たちがインタビューに行った村でも、1キロほどのところに小学校があり歩いて行ける範囲なので、どこの家庭でも子どもたちを小学校に行かせていた。しかし、中学校、高校と進むにつれて家からどんどん遠くなってしまうので、経済的にも通学距離的にも進学が厳しくなってしまうと聞いた。この村では、経済的理由で中学に行かせたいけれど難しいという家庭もいくつかあった。ましてや、高校はコンポントムまで行かなければいけないので、車もバスもない以上通うことがほぼ不可能であり、高校に進学する人は調査では聞かなかった。このことから都市と農村では就学率が大きく異なり、就学率の少ない農村でもさらに就学できない子どもとできない子どもに差ができてしまうことが分かった。

次に、住居の違いである。カンボジアの農村ではみな、木やヤシの葉でできた高床式の家であった。高床式の理由は毎年雨期になると洪水になるので家が水に浸からないため、また風通しがよく室内が暑くならないようにするためである。また室内には、服を着替えるための部屋

が仕切られている以外はひと間であり、家族みんながそこにいた。部屋の端には日本のように仏壇があり、お供え物もあった。壁には、家族の写真やカンボジアのファッションショーの写真が飾られていたりとそれなりにどの家も装飾されていた。しかし、その家の豊かさによって、家屋に使われる材料も異なっていた。屋根には瓦、トタン、藁、ヤシの葉で葺かれている家があった。また家の素材も木造の家とコンクリートの家があった。インタビューでまわった家々は全部木造で、屋根の違いと家の床高さの違い、上までの階段が木か鉄かの違いがあった。また訪問はしていないが、コンクリートで作られた家は外から見ることはできたが、綺麗な塗装がされていて、家の周りには有刺鉄線が張られていた。通訳の人によればその家の人は、タイへ出稼ぎに行っている人で経済的にも豊かであり、そのような家を建てまた他の家々からの嫉妬などによるいたづらを防ぐために有刺鉄線を敷地に張り巡らせたということだ。このように、農村においてそのステータスによって住居も大きく異なっていた。では、次に都市部の住居について述べた上で比較する。都市部ではロベーンと呼ばれるアパート形式の住居が多く見



られた (p.143)。この住居は大きな通りに面した場所に建てられ、奥行きがあるので表がお店になっていて、その奥に普段の生活スペースが作られていた。文献によると、この住居はもともと平屋だったものにどんどん上へ増築していったものであり、縦へも横へも増築できるように鉄筋が建物の外にはみ出していた。農村では水は井戸水を使い電気はバッテリーから引いていたが、都市部ではもちろん、電気、水道、ガスが普及しており、日本と同様にして利用

することができた。ロベーンの家々はしっかりとしたシャッターがついていて夜になると、一階のシャッターは完全に閉められていた。農村のように、その村の人々だけでなく、様々な人々がいる都市部での防犯の重要性は街を出歩いてみて理解できた。

今までに見た就学率の違いや、住居や生活の違いからカンボジアの都市部と農村における格差、さらには農村内にある格差を見ることができた。プノンペンやシェムリアップといった都市部では、日本となんら変わらず生活を送っているようであった。途上国ならではの多くの人々がバイクに乗り道路を走っていることは別にしても、巨大スーパーがあり、ファーストフード店やコンビニがあり、様々な料理のレストランがあり、私たちが日本で過ごしているのと同じようなことをカンボジアでもすることができた。しかし、農村へ行くと、道路を整備されていなかったり、トイレもなく衝撃を受けた。木村文さんの話によるとカンボジアの日系企業投資ブームが今起きているとのことであった。その理由は、カンボジアの高い経済成長率であり、また日本は製造業への投資なのでカンボジア人の雇用促進につながり、どんどん上向きになるとおっしゃっていた。しかし、経済成長が進むのは都市部なので我々のような外国人も暮らせるほどに都市部は生活水準が高くなっていくが、全体を見た場合の水準はまだまだ低い。文献でも、その理由は経済成長が都市に偏ったからだと言われている (p.339)。農村でインタビ

ューした女性にも結婚するまではプノンペンの服工場で働いていたと言っていた。実際カンボジアの貧困層と見なされる人々の9割は農村部居住者である。また農業で生計を立てる世帯の4割が貧困ラインを下回っていた。つまり、経済的に豊かな人はごくわずか多くの人々が今だに貧困とされるレベルの生活をしていることがわかった。よって、都市部の経済発展同様、農村でも農業以外の雇用を新たに創って生活を豊かにしていかなければならないと考える。また生活水準の向上のために、PHJの活動のような衛生指導や、トイレの設置といった活動が必要である。

これらのことから、カンボジアにも日本と同様の都市と地方の差と貧富の格差があることがわかった。まだまだ全体の生活水準は低い。都市部の人々の生活は我々とほとんど変わらないものであった。また農村においても、衛生面はまだしっかりとしていないが、うまく環境に適応し多くの家庭では不自由のない生活を送っていた。その中でも本当に貧しい人々が子どもたちを学校へ行かせたり、洪水時に苦労しないように今後支援していく必要があると考える。私はこのスタディーツアーを通して、農村の生活に始め衝撃を受けたが、そこに住む人々はそこで生まれた時から普通に生活しているのだと気づき、何も不自由しているわけではないと強く感じた。農村の子どもたちが楽しそうに遊んでいる様子や、女の人たちが集まって世間話をしている様子を見て、国によって人の関わりや様子は全く違うものだと思っていたが、どこの国も変わらないものだと知ることができた。今回このスタディーツアーに参加しとても良い経験ができた。



カンボジアの農民は「水」とどう向き合うのか

—ライフスタイル・農業・洪水について考える—

教養学部

杉本 麻弥

1. はじめに

昨年 2011 年は日本、そして他のアジアの国々が、実に多くの天災に見舞われた年だった。まず 3 月 11 日に起きた東日本大震災。津波、原発事故の爪あとは、1 年半たった今でも消えることがない。そして、今度は 7 月に東南アジア各国で、平年を大幅に上回る大雨や台風、暴風雨による洪水被害が発生した。この洪水は 3 ヶ月以上も続き、800 万人以上が被災したといわれている。カンボジアも例外ではなく、死者 250 人以上、被災者 150 万人、稲作地の 17%にも及ぶ 445,530ha の農地が被害を受けた。

それからほぼ 1 年がたった今年の 9 月 1 日から 8 日にかけて、私は「フィールド科学調査法」の講義の一環として、カンボジアスタディーツアーに参加した。今回のスタディーツアーの主な目的は、カンボジアの農村に住む人々が、昨年の洪水の際に、どのような行動をとったのかということ进行调查することである。実際にコンポントム州の Tnoat Chumn 村で調査をしてみると感じたことは、洪水や公衆衛生の問題から農業や生活用水にいたるまで、良くも悪くも「水」が村民に与える影響が非常に大きいということだ。そこでこのレポートでは、カンボジアの農村に住む人々が、どのように「水」と付き合っているのかという点を中心にまとめていきたい。

2. 調査概要

調査地：カンボジアコンポントム州 Tnoat Chumn 村

調査日：2012 年 9 月 4 日・5 日

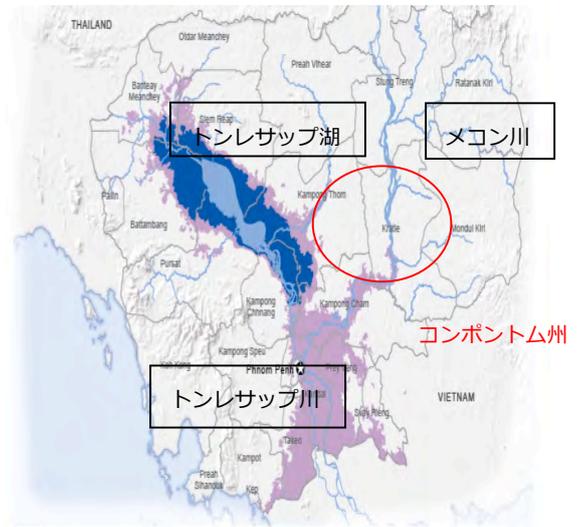
6 人の村人の方にご協力いただき、1 人につき 1 時間程度のインタビューを行った。

- ・ Siv Kim さん/56 歳男性/Tnoat Chumn 村の村長・米農家/妻 56 歳、娘 3 人 35 歳・28 歳・24 歳、息子 3 人 32 歳・21 歳 12 歳（そのうち同居している子どもは 3 人）
- ・ Kong Sok Eng さん/32 歳独身女性/小学校教諭/父 58 歳、母 56 歳、妹 24 歳、弟 2 人 27 歳・25 歳
- ・ Toek Chun さん/43 歳男性/米農家/妻は 2008 年に心臓の病気で他界（享年 45 歳）・姉 56 歳、息子 21 歳、娘 4 人 18 歳・16 歳・12 歳・8 歳（16 歳と 8 歳の娘は近所の子どもを預かる家庭のもとで暮らす）
- ・ Ke Moa さん/53 歳女性/米農家・主婦/夫、娘 5 人 32 歳・29 歳・27 歳・22 歳・18 歳、息子 24 歳、孫息子 2 人）
- ・ Mech Chan Oru さん/26 歳男性/米農家/両親、おば、妹 3 人 23 歳・20 歳・15 歳、弟 17 歳）
- ・ Eou Sokheoun さん/46 歳女性/ヘルスセンタースタッフ/娘 2 人 24 歳・5 歳/息子 3 人 22 歳・18 歳・16 歳）

3. 農村のライフスタイルと洪水

カンボジアはインドシナ半島のメコン川下流に位置し、国土の多くが低地である。そのため、潜在的に洪水のリスクが高いといえる（表 1・グラフ 1 参照）¹。2000 年以降の主な自然災害を見てみても、洪水が圧倒的に多い（表 2 参照）²。

カンボジアの気候は熱帯モンスーン気候で、5 月～10 月の雨季と、11 月～4 月の乾季に分かれている。雨季には、メコン川の水はトンレサップ川に流れ込み、トンレサップ川は逆流し、トンレサップ湖は倍以上の大きさに膨れ上がり、天然の貯水池としての機能を果たしている（右図³の■が平年の乾季の湖の範囲で、■



が平年の雨季の湖の範囲)。規模の大小はあるものの、雨季にメコン川が氾濫することは珍しくない。人々はそのときに運ばれてくる滋養分を活用して農業を行っている。しかし、昨年の洪水は桁違いで、例年通りの構えでは対応しきれず、甚大な被害が出たようだ（同図の■が 2011 年の湖の推定範囲）。

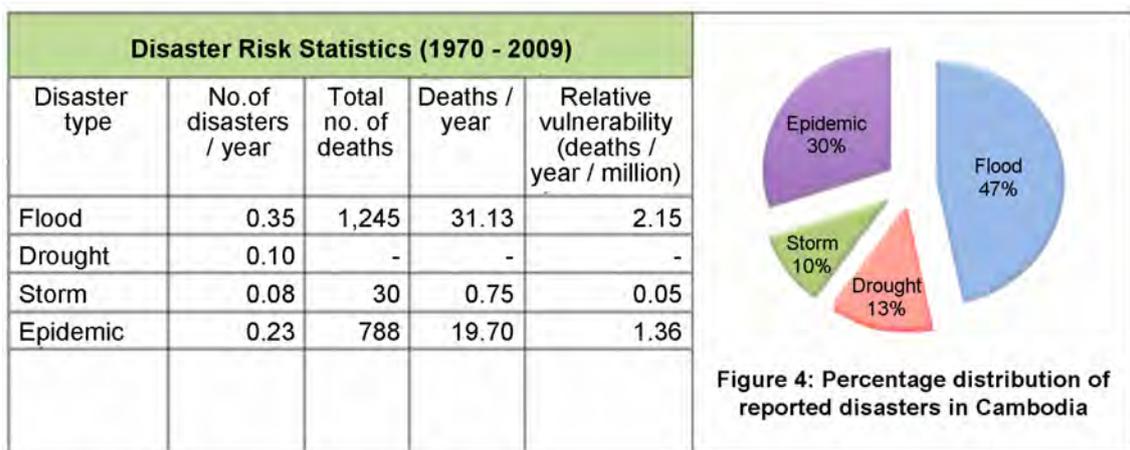


表 1・図 1：カンボジアの災害リスクの統計（1970-2009）

¹ Synthesis Report on Ten ASEAN Countries Disaster Risks Assessment, http://www.unisdr.org/files/18872_asean.pdf [閲覧日 2012 年 9 月 16 日]

² アジア防災センターのホームページを参考にして作成

http://www.adrc.asia/nationinformation_j.php?NationCode=116&Lang=jp&NationNum=06 [閲覧日 2012 年 9 月 16 日]

³ Cambodia Floods - Humanitarian Snapshot as of 18 October 2011,

http://reliefweb.int/sites/reliefweb.int/files/resources/KHM_snapshot_111019.pdf [閲覧日 2012 年 9 月 16 日]

| | | |
|------------|-----|---|
| 2000/08～ | 洪水 | 北部・東部・南部で甚大な被害。121,000 世帯被災、170 人以上死亡。100,000ha の水田が被害。 |
| 2001/08 | 洪水 | メコン川の氾濫。死者 35 名。300,000ha の水田が被害。 |
| 2002/08 | 干ばつ | 185 地域のうち 60 地域（カンボジア南部）が深刻な被害 |
| | 洪水 | メコン川沿岸部の北東部、南東部。18 人が死亡（そのほとんどが子ども）。2,155ha の作物が被害。 |
| 2006/08 | 洪水 | 集中豪雨によるメコン川の洪水。少なくとも 8 人死亡。数千 ha の農地に損害。 |
| 2009/09/30 | 台風 | 中部コンポントム州で少なくとも 9 人死亡。 |
| 2010/10/15 | 鉄砲水 | 同月 11 日からの豪雨により鉄砲水が発生。プルサト川流域では広域で浸水被害。 |

表 2：2000 年以降のカンボジアにおける主な災害

農村に住む人々はこうした環境に対応して生活を営んでいる。農村では、木材、藁、竹、ヤシの葉といった材料を使った高床式の家が主流である（写真 1）。これは、風通しが良かったり、雨季に家が水に浸からない、虫やねずみ・蛇などの侵入を防ぐことができるといった利点がある。しかし木材で作られた柱は、長期間水に浸かってしまうと、腐ってもろくなりやすい。そのため、柱の付け根の基礎の部分はコンクリートが使用されていた。また最近、昔ながらの木製の階段に代わってコンクリートの階段を設置する家が増えてきたそうだ。Mech Cham Oru さんによれば、このコンクリート製の階段は市場で買い付け、大工に頼んで設置してもらったとのことだった。今年の洪水の際、実際 Tnoat Chumn 村ではこの高床式の構造のおかげで、家屋や家具自体には被害は無かった。私たちは 2 日間で 6 人の村人の方にインタビューしたが、どの家庭も床下浸水で済み、どこかに避難しなければならないなどといった状況にはならなかったそうだ。



写真 1 農村の家屋



写真 2 バナナの花を調理する女性



写真 3 家畜の様子 奥には農機具

床下の活用（写真 2・3）の仕方も興味深かった。例えば、人々はそこに牛車や鋤などの農機具を置いたり、籾米の貯蔵場所にしたり、ハンモックを吊るして昼寝をしたりする。また、ウッドデッキを設置している家庭が多く、ご近所さんたちが集まって談笑していたり、女性たちが食事の準備をしている姿をよく見かけた。子どもたちのことも近所同士で面倒を見合う。私たちのインタビューには PHJ 現地スタッフの Sophea さんと村長の Siv Kim さんが同伴してくださったのだが、2 人は通りかかる村人たちと気さくに声を掛け合っていた。Tnoat Chumn 村の人口は 1125 人であるが、Siv Kim さんは生まれたばかりの子ども以外は全村民と顔見知り

だという。日常的に農機具を共同で利用したり、また3月には収穫祭が開催されるそうで、村人同士の仲のよさをうかがわせる。

次に農村の暮らしに不可欠な生活用水や電気の確保についても触れておきたい。地下水が出る場所では、井戸（写真4）を掘っている。また、家の軒に取り付けた雨樋の下に水瓶を置き、雨水を溜めている（写真5）家庭も多く見られた。しかし、雨水に頼っているだけでは乾季を乗り切るのは難しい。『カンボジアを知るための60章』⁴の中に、「川の水を飲用する場合は、ミョウバンの固まりで水をかき回し、浮遊物を沈殿させてから利用する」との記載があったが、今回のインタビューでは特にそのような話は聞けなかった。しかし、今回の調査で、昨年の洪水後、NGOの支援を受けて、新たにウォーターフィルター（写真6）を利用する人が増えていることがわかった。（Siv Kimさん、Toek Chunさん宅、ヘルスセンターで見かける）



写真4 UNICEFによる支援で作られた井戸



写真5 水浴びや生活用水用の水瓶 奥の建物はトイレ



写真6 ウォーターフィルター

Tnoat Chumn村には電気が通っていないため、村人たちはトラックに使うような大型のバッテリーに電気をチャージして利用していた（写真7）。1回の充電は1500リエル（約29円）ほど。テレビや扇風機などはすべてこの電気でまかなう。もっとも、農民の生活は早寝早起きが当たり前で、電気をあまり消費しない。農家のToek Chunさんは朝5時に起床して、夜は8時に寝るといふ。また、学校は7時に始まる。なお、ヘルスセンターの電力は屋根に設置された太陽電池でまかなう。しかし、曇りの日には電力が不足することもあるので、その場合は患部を懐中電灯で照らして対応するそう。



写真7 バッテリーを充電する様子

村の人々は普段ラジオを聴いて情報を得る。音楽などもこれで楽しむが、大きくて重いため、基本的に家に置いたままである。昨年の洪水の時には、ラジオとともに、持ち運びできる情報源として携帯電話が役立った。Mech Chan Oruさんは村の内外の友人と連絡を取り合ったり、プノンペンで英語の教師をしている妹から家畜の様子を心配する電話があったそう。首都プノンペンではスマートフォンの巨大広告を街角でよく見かけた。また、コンポントム州に通じる国道6号線沿いにも中古の携帯電話を売る店がいくつもあり、農村にも携帯電話が浸透しつつあることを実感した。

⁴ 上田広美・岡田知子編『カンボジアを知るための60章』，明石書店，2006。

副業で漁業をする農家が多いため、床下にボート（写真 8）が置いてある光景をよく見かけた。Toek Chun さんもその一人だ。普段は自分で食べたり、近所の人に売るための魚を獲るのにボート使うが、洪水の時には、家畜のえさになる草を探すのに用いたそうだ。Tnoat Chumn 村の人々の移動手段は徒歩か自転車である。小学校に通う子どもたちのうち 3 割程度が自転車で、他の子どもたちは歩いて登校する。洪水の時にヘルスセンターに来た患者さんもほとんどが徒歩だったそうだ。ただ、ヘルスセンターでは重症の人を治療することはできないため、プノンペンにある大きな病院に PHJ が所有する車やオートバイで搬送する。他にも、副業として村で売店を営んでいる Mech Chan Oru さんは、おばさんが運転するオートバイに乗って、コンポントムの中心街の市場へ商品の仕入れに行くそうだ。



写真 8 手作りのボート

4. 昨年の洪水後の変化と今後の課題

Tnoat Chumn 村では多くの村民が農業で生計を立てているため、水田が被害を受けたことが一番の痛手だったようだ。今回インタビューした 4 件の農家のうち、Mech Chan Oru さん以外は洪水後新たに早生米(Dry rice) を育て始めた。この品種はおよそ 3 ヶ月で収穫ができる。政府からの支援を受けたり、自分で早生米の種籾を購入したという。今のところ稲の成長は順調だ。しかし、味があまり良くなく、全ての農家が完全に早生米に移行したわけではない。Ke Moa さんの田んぼでは従来の品種の米 (Raining rice) と早生米の 2 種類を育てている。いずれにしても、農業だけで生計を立てるのは厳しいのが現実だ。先ほどあげた Mech Chan Oru さんも今年から売店の営業を始め、収入の足しにしていると話していた。

この問題は子どもたちの教育面にも影響を及ぼしている。小学校と中学校の授業料は基本的に無料であるが、中学校に進学する子どもは 70%ほどである。兄弟姉妹が多いカンボジアの農村の家庭では長男（長女）が弟・妹のために進学をあきらめるケースがよくあるそうだ。実際長男である Mech Chan Oru さんは、兄弟の中で唯一中学校には行かずに親の手伝いを始めた。小学校の教師をしている Kong Sok Eng さんによれば、子どもたちの将来就きたい職業でもっとも人気があるのが学校の先生と医者、次いで警察、弁護士の順だという。農家になりたいという子どもはあまりいないそうだ。Ke Moa さんが 3 歳の孫息子に就いてほしい職業も「教師」、Mech Chan Oru さんも「将来子どもができれば娘には先生、息子には警察になってほしい」という答えだった。また、「子どもたちと一緒に農業をしたくはないのか」という質問に「農業は難しいから」と苦笑していたのが印象的だった。

村長の Siv Kim さん（写真 9）に村の課題について質問してみると、真っ先に挙げられたのが公衆衛生の問題であった。Siv Kim さんは PHJ や他の NGO、ヘルスセンターから教わった衛生管理



写真 9 村長の Siv Kim さん

の方法を、定期的に村人たちにレクチャーしている。ミーティング用の広場には大体村人の75%が集まるそうだ。村人の中には読み書きできない人もいるため、ポスターを使って説明する。しかし、村のあちこちにスナック菓子の袋が落ちていて、まだまだ村民の衛生管理に対する意識は低い。ヘルスセンターのスタッフである Eou Sokheoun さんによれば、洪水の時には不衛生な水が原因で皮膚病や下痢の症状を訴える人が多かったそうだ。また、今年になってもその時の水溜りが残ったままであり、蚊が大量に発生しているという。蚊はデング熱を媒介するため、一刻も早く排水設備を整える必要がある。

公衆衛生の問題を解決する上で欠かせないのが NGO、NPO からの支援だ。数年前まで、農村ではトイレの設備を整えていない家がほとんどで、家から少し離れたところに場所を決め、そのたびに少し掘って埋めるようにしていた。これは雨季になると流れ出てしまうので、衛生的に良くなかった。しかし今では、PHJ をはじめ NGO の支援のおかげで、写真5のようなきちんとした小屋のトイレが着実に増えている。前述したとおり、NGO やユニセフの支援でもたらされたウォーターフィルターや井戸も人々の生活や意識を変化させた。もちろん国内の問題をカンボジア政府の力で解決できればそれに越したことはない。しかし、昨年の洪水でも被災した小学校やヘルスセンターには政府からの支援が行き届かなかったのが実態だ。Tnoat Chumn 村の人々が自分たちの生き方を自ら選択できるようなサポートをするためにも、政府や地方自治体、NGO、NPO 同士の情報共有や連携が重要であると思う。

5. おわりに

Tnoat Chumn 村で調査をしてみて一番の発見は、村人にとって洪水は珍しいものではないということだ。東日本大震災の時の津波の映像が頭にあった私は、あらかじめ用意していた質問のほとんどが「どのように避難したのか」というものだった。しかし、実際は災害が起こった時に初めて特別な何かをするのではなく、普段の生活がすでに洪水に対応していたのである。日本では震災後に“家族の絆”“地域の絆”が盛んに叫ばれた。技術や設備云々ではなく、床下のオープンなスペースが生んだ住民間の親密な関係が、昨年の洪水の際の食料を融通しあうなどの助け合いにつながったのだと思う。

公衆衛生の問題や農業だけで生計を立てることが難しいといった問題など、まだまだ課題はたくさんあるが、PHJ のスタッフ、ヘルスセンターの職員、村長さんをはじめとした Tnoat Chumn 村の人々が一緒になって解決策を模索している姿は心強かった。

カンボジアで長年ポルポト裁判の取材をしているジャーナリストの木村文さんは、カンボジアは人々の生活が刻々と変わっていくところがおもしろいとおっしゃっていたが、2年後、3年後 Tnoat Chumn 村はどう変わっているだろう。機会があったらぜひまた自分の目で確かめたい。最後に今回私たちのつたないインタビューに答えてくださった Tnoat Chumn 村の方々、サポートしてくださった PHJ のスタッフの皆様、そして三浦先生に今一度お礼申し上げたい。

無知をなくす

教養学部
菅野真衣子

1. カンボジア=貧しい国、日本=豊かな国は本当か

私はカンボジアを訪れる前、カンボジアは発展途上国であり、カンボジアの人々は、豊かな日本の暮らしとは全く正反対の、とても貧しい生活を送っているのだろうと考えていた。なぜなら私の中で、日本における生活必需品やモノ・サービスがない生活=貧しいという見方があったからである。カンボジアは途上国であるから、日本で当たり前のように使われている電気やガス、電気機器などは一切なく、着る服もあまり良いものではないのだろうと考え、カンボジアは貧しい国と定義づけていた。

さらに、カンボジアの1歳未満児の死亡率は4.5%（日本は0.3%）、5歳未満児の死亡率は5.4%（日本は0.2%）とあり（*Cambodia Demographic and Health Survey, 2009* より引用）、日本と比べて母子保健や医療制度が充実していない。就学率を見ても、小学校は95%前後と高いものの、中学校は都市部で約50%、郡部で約32%、高校となると都市部で約46%、郡部では約15%と、学年が上がるにつれてどんどん低くなっていることが分かる。（教育省の教育指標2010~2011より引用）カンボジアの子どもたちへの教育が不十分であること、都市と郡部での教育格差が大きいということが言えるだろう。さらに国民総所得（一定期間に国民によって新しく生産された財やサービスの付加価値の総計）のデータを見てみると、日本の34,640ドル（約277万円）と比べて、カンボジアは2,080ドル（約16万）と格段に低いことが分かった。

このようなデータを見てみても、自分の持っていたイメージ通り、やはりカンボジアは経済的にも物質的にも貧しい国だという印象は変わらなかった。今回私は、カンボジアの女性を対象にインタビューを行ったので、女性から見た農村での暮らしを考察していく。そのなかで、彼女たちが実際に貧しさを感じているかどうか確かめていくとともに、さらにカンボジアに関する新たな発見や気づきも得られればと思う。

2. インタビュー調査

oKang Heng さん（56歳女性、タノンチュム村の村長夫人）

普段は掃除、炊事、井戸水運びなど家事全般と畑仕事、副業として、売りに出すためのじゅうたん作りをしている。子どもは6人おり、そのうち3人と同居している。村長の家ということもあり、家の壁は木の板で作られ、階段は手すりにデザインが入っていた。家の中もとても広く、壁一面にポスターや写真などが貼ってあった。さらに、私たちがインタビューを行った床下のスペースには、自らが作ったじゅうたんの上に布の敷物が敷いてあり、とても裕福な家庭であることが分かる家のつくりであった。ご主人が村長になったときに得た収入や毎月の安定した給料に加え、売りに出すために子牛を飼っていることもあり、困窮している様子はまっ

たく見られなかった。彼女自身、インタビューの中でモノとお金は十分にあると思うと話していた。

また村長夫人として、普段から村民たちに洪水に対してのアドバイスをしているとも話していた。これは、権力を持つ村長の夫人だからこそできることだと思われる。

昨年の洪水被害としては、水が引くのに2ヶ月間かかったため、畑がだめになってしまったこと、家畜のエサの草を探すのが難しかったこと、ウォータースポットと呼ばれる皮膚病にかかったことなどが挙げられた。皮膚病はPHJの薬を使って治したと話していた。



(左：Kang Heng さんと Kang Heng さんのお宅、右：家の中の様子)

○Kit Phean さん (25 歳女性、妊婦さん)

インタビュー当時妊娠8か月で、7歳と4歳の子どもがいる。普段は家事全般と畑仕事をしている。インタビュー時に近所の子どもやおじさんおばさんがたくさん集まってきて、とても賑やかに話をしてくれたのが印象的だった。実際にご近所とは付き合いが多く、普段から良くしてもらっているとのことであった。

洪水のときに大変だったことは、子どもが皮膚病にかかったこと、家畜の避難場所の確保が難しかったこと、食糧の確保ができず都市部の会社に食糧をもらいに行ったことなどと話していた。

また彼女の話のなかでもっとも興味深かったのは、学校に関するエピソードだった。彼女は8歳から4年間学校に通っていたが、家庭の経済的理由から途中退学をしたということだった。学校で友人たちと遊ぶのがとても楽しく、本当は学校を辞めたくなかったのに、辞めてしまったことを悔しく、残念に思っているそうだ。そのようなことがあったからか、自分の子どもには学校にきちんと行かせて、将来は先生になってほしいと話してくれた。

○Seang Sen さん (57 歳、既婚女性)

彼女には8人の子どもがおり、そのうちまだ独身の3人の子どもたちと同居している。ご主

人は病気で、家で療養中とのことだった。畑は持っておらず、家事全般をこなしながらご主人と一緒に自宅で小さなお店を営んでいる。お孫さんが生まれてからはお孫さんの世話も手伝っているといい、インタビュー中も、お孫さんが寝ているハンモックをゆする様子が見られた。農家には、大学まで教育を受けさせてあげられるお金もなく、あまり賢い子でもないので、お孫さんたちには農民としてこの村に居続けてほしいと思っているそうだった。



(左：Kit Phean さんと 4 歳のお子さん、右：Seang Sen さんのお孫さん)

oNhem Khan さん (82 歳、TBA)

5 年以上前にご主人が亡くなり、4 人の子どもたちも結婚して家庭を持ったため、今は一人暮らしをしている。しかし子どもたちが近所に住んでいるため、ときどきご飯を作って持ってきたり、様子を見に来ることもある。インタビューのときも息子さんやひ孫さんが家に来ていて、家族との仲の良さが感じられた。家はとても古く、壁はわらやヤシの葉で作られてい



た。階段は細い丸太でできており、手すりがない簡素なものであった。家の中には、PHJ のポスターや公衆衛生に関するポスターが貼られていて、そのポスターを使って妊婦さんへの助言や指導を行っているということ話を話していた。

洪水のときには、田んぼが水に覆われてだめになってしまったこと、エサとなる草を十分に得られず水牛やニワトリが死んでしまったことなどを具体例として挙げていた。家に対する被害はなかったとも話していた。

(右上の写真は Nhem Khan さんのお宅 階段の最上段にいるのが Khan さん)

3. インタビュー結果の分析

はじめに、インタビューのデータを振り返ると、一見似たような家が並ぶ村の中でも、家のつくりや着ている服、家畜の数などから、貧富の差が少なからずあることが分かった。各家庭の子どもたちが学校に通っているかどうかからも、教育に充てるお金がある家庭なのかどうかを知ることが出来た。また、洪水のときにも、お金がある家庭ではボートを使って移動していたが、ボートをもっていない家庭は汚れた水の中を歩くしかなく、その結果皮膚病にかかってしまうなど、貧富の差で被害の内容にも違いが見られた。そしてその貧富の差は、職業に多く起因していると考えられる。農業だけの家庭よりは、副業がある家庭や都市に出て働いている家族がいる家庭の方がお金に余裕があり、そのお金で十分な教育を受けられる子どもは農家以外の職業選択の自由を得ることができる。そうやってますます格差は広まっていく。

次に、事前学習ではカンボジアの農村は妻方居住の拡大家族が多いとのことだったが、実際には核家族で住む家庭がほとんどで、農村に共通する生活形態であることが分かった。三世帯で同居している家庭はあまり見られず、予想とは反する現状であった。そして、核家族形態で住んでいるといっても、離れて住む家族との関係はしっかりと続いていた。子どもたちが収穫の時期に手伝いに来たり、孫の世話を手伝うなど、別の場所に暮らしていてもお互いを気にかけている様子がどの家庭からもうかがうことが出来た。これは、農作業は一人ではできないため、誰かに手伝ってもらったり、反対に自分が助けてあげながら生活をするのが当たり前だとされているからだと考えられる。すべて一人でなんとかできてしまうような仕事ではないからこそ、家族のつながりを大切にしているのではないだろうか。

また、村の中で携帯電話を使う人がいたことにとっても驚いた。女の子は髪をシュシュでまとめたり、自由な恋愛が主流になってきていることも、日本とよく似ていた。家事は女性がすべて行う、外では子どもたちがたくさん遊びまわっている、近所同士で自然と集まっている、こういった様子も、どこか少し前の日本を感じさせるような光景だった。

4. まとめ

私ははじめ、カンボジアと日本の交流や、日本がカンボジアに影響を受けたことも、反対にカンボジアが日本に影響を受けたこともない、関わり合いの薄い国同士であるという意識を持っており、生活習慣や生き方、考え方も全く違うものだと考えていた。無知であることが、カンボジアへの勝手なイメージを作り出してしまっていた。しかし実際には、携帯電話も普及し、私たちと同じような服を着て生活していることが分かった。日本と比べてモノや娯楽の種類こそ少ないが、人々は農村の生活に満足しており、自分たちが貧しいというようには考えていなかった。貧しさは比較して見出すものではない。また、貧しいというものさしは人によって異なるものであり、簡単にはかれるものでもない。そのことに気づくことができた貴重な体験だった。

【参考文献】

- ・ 上田広美、岡田知子編著『カンボジアを知るための62章（第2版）』明石書店, 2012.
- ・ こどもくらぶ『世界の市場 ベトナム・カンボジア』アリス館, 2007.

【参考 URL】

- ・ 国民総所得（GNI）ランキング・国別順位 - WHO 世界保健統計 2012 年版.

http://memorva.jp/ranking/unfpa/who_2012_gni_goss_national_income.php